# デュララララ!! 池袋最強の妹!!

Σ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デュララ！！　池袋最強の妹！！

【Ｎコード】
Ｎ８５２６Ｘ

【作者名】
Σ

【あらすじ】
主人公はなんと平和島静雄の妹！！
そんな彼女をデュララ！！の話に加えてみました。
原作の話を使っています
初めて書いた小説です。なのでその辺はご了承くださいませ。

## ×1　入学（前書き）

時間は原作の４巻です。
帝人と杏里が２年生です。

## ×1　入学

私は気付いたら真っ白な部屋に寝ていた。
起き上がろうとしても、体が動かない。
私は怖くなって叫ぼうとした。力の限り。
だが、声を出すことも出来なかった。
すると、白衣を着た男達が部屋に入ってきた。彼らは不気味な笑顔で私に近づいて来た。
私の心の中は
―こわい。くるな。ちかよるな。こわい。こわい。こわい。こわい。こわい！！―私の目の前は真っ暗になった―

「おーい、おーい」
少女は目を覚ました。
少女はあわてて声のした方を見る。すると、
「君、大丈夫か？」
と、心配そうにこちらを見る男性教師がいた。
なんで先生が？と疑問に思っていたが、
そこで、目を覚ました少女――『平和島陽（へいわじまひなた）』はここが学校の体育館で入学式の最中である事を思い出した。
教師には大丈夫です。と伝えた。

陽はさっきまで見ていた夢について考えながら、入学式の話を聞いていた―

入学式が終わり、自分の教室へ戻った。
教室ではＨＲが行われ、自己紹介が始まった。
様々な自己紹介があるなか特に気になった少女がいた。その内容は
「折原舞流（おりはらまいる）です！　よろしくねッ！　好きな本は百科辞典とエロ本です！」
最初はウケ狙ってるなあとしか思ってなかったが、
「恋愛も性欲も基本的に両刀です！」
の一言にかなり驚いた。
格好は黒いセーラー服に三つ編みに眼鏡という清楚な印象なのに……でもこの学校の制服は青いブレザーだから目立つよなあ……
そんな事を考えていたら、自分の番になっていた。私は立ち上がって、
「平和島陽です。よろしくおねがいします。」
と、無難な自己紹介をしておいたが、周りは少しざわついた。
まあそんな反応しちゃうよね。この名字はあの『池袋最強』を思うよね。
という事を考えていた。しかし、そんな周りの反応と違う反応をしている人がいた。

その人物はさっき凄い自己紹介をしていた、折原舞流だった。舞流はこちらをじっと見ていて笑っていた。それが物凄く気になった。

自己紹介が終わり、次は委員会決めらしい。クラス委員はなかなか決まらなかった。私は少し迷っていた。
めんどくさそうだけど、少しやりたいなぁ。誰もやる気は無いし、やるか！
という軽い気持ちで立候補し、男子は決まっていたので、すぐに決まった。
クラス委員は放課後顔合わせがあるらしい。
やっぱりめんどくさい仕事なんだろう。と、思っていた。

ＨＲが終わり、休み時間になった。皆仲の良い友達と話していた。
私は友達は他のクラスなので１人で座っていた。
暇だなあ…なんか見てくる人がいるし…
そんな事を考えていたら、誰かが話しかけてきた。

「ねぇねぇ！　平和島陽ちゃん！」

その声の主―舞流だった。そちらを見るて、

「何？」

とそっけない返事をしてしまった。
…しまった…こんな話し方だから友達が少ないんだよなぁ…
と、後悔していると

「陽ちゃんって静雄さんの妹だよね！？そうだよね！？」
「まあ…そうだけど…」

「やっぱり！という事は、幽平さんの妹って事だよね！？ヤバいよ！超ヤバいよ！」

なんか少し（？）騒がしい子だなあ
こうして高校に入って初めて出来た友達は変わった子でした――

## ×1　入学（後書き）

短くてごめんなさいm（__）m

週一で書いていく予定です。

## ×2黒沼青葉

――放課後――

私はクラス委員の顔合わせがある部屋にいる。そこで待っていると、

「あれ？陽？」

と、よく知っている人間の声が聞こえた。そっちを見ると、幼い顔立ちで私より背の低い少年――黒沼青葉がいた。

「やっぱり陽だ！」

と小学生のようにはしゃぐ姿を見て、

相変わらず猫被ってんなあ。本性はもっと凄いのに…と、思っていた。

「青葉もクラス委員なのか？」

「うん。そうだよ。」

「なんでやろうと思ったの？」

「それはね…」

と言いながら、青葉は手招きしてきた。

「興味がある先輩がいるんだ」

とさっきまでの子供っぽいしゃべり方ではない、雰囲気で言った。
本性見せたな。
と、思いつつさっきの言葉で気になった事を聞いてみた。

「先輩って誰？」

「それは委員会の後で。」
と、言って席に着いてしまった。仕方ないので座って、始まるのを待った。

委員会が終わり、青葉の所へ行った。

「で、その先輩は誰なの？」

「そんなに焦るなよ。」

部屋には誰もいないからか、話し方も変わっていた。
「まあ、付いてきなよ」

と、部屋から出て行ったので言われた通りに付いていった。
廊下に行くと、先輩が前を歩いていた。青葉は見つけると、

「いたいた。」

と言ってその先輩に声をかけていた。

「あ、あの！竜ヶ峰帝人先輩ですよね！」

その先輩――竜ヶ峰帝人先輩はこちらを振り返った。あんな大人しそうな人に青葉は興味を持つのか？いや、実はなんか凄いのかも知れないと思っていると、

「ええと、君は確か…さっき自己紹介してた…青葉君と平和島さん？」

「はい！1年の黒沼青葉です！」

「1年の平和島陽です。」

一応挨拶しておいた。

「さっき挨拶を聞いてびっくりしました！本当に竜ヶ峰先輩だったなんて！」

青葉は嬉しそうに話しているが、帝人先輩は混乱していた。びっくりするだろうなあ、会ったことない後輩にこんなこと言われて。

「ああ、ごめんなさい。俺と先輩は初対面ですよ？」

「あ、そうなんだ。えっと…じゃあ、なんでびっくりしたの？」

まあ、当然だよね。その疑問は。

「先輩って…ダラーズの人ですよね？」

「「……ッ！！」」

この言葉には帝人先輩はもちろん私も驚いた。
どこからそんな情報を手に入れたんだ？
帝人先輩は否定したが、次の瞬間、帝人先輩と私の携帯が鳴った。

「やっと届いたあ」

とニッコリと青葉は笑った。
この先輩が何なのかは分からないけど、こんな後輩に好かれて可哀想に…
そう思いながらメールを見ると、ダラーズのメーリングリストによる連絡で、『若葉マーク』と『田中太郎』と私のハンドルネームの『凛』があった。

「もしかして…君が…」

「若葉マークです！登録サイト色々あって消えちゃったから俺の名前残ってないですけど…」

「ど、どうして僕がダラーズの一員だって…？」

帝人先輩は動揺していた。
「1年前のダラーズの集会で、ターゲットの女と言い争いしてたでしょう？だから、気になって覚えていたんです！」
思い出した。確かに帝人先輩だったな…じゃあ先輩がリーダーなのか？だったら青葉が興味を持つのもわかる。

「ええと、ほら、勘違いとかじゃないかな？」

「今のメール」

「ああ、そ、そうだね」

青葉が押してるなあ…

こんな気の弱そうな人がダラーズのリーダーな訳ないか…きっとリーダーと顔見知りかなんかだろう

「秘密なんですね！安心してください、俺たち、誰にも話しません！」

勝手に約束したなコイツ…まあ、言うつもりはないから、いいや。

「どうしてあの夜はあんな…。もしかして、竜ヶ峰先輩ってダラーズの幹部なんですか？」

「いやいや！僕は小間使いだよ！」

「そうなんですか？でも、ダラーズの人が身近にいるだけで感動ですよ！」

完全に猫被ってんな…

本性知っていると気持ち悪くて仕方がない。

帝人先輩は諦めたように息を吐き、

「…解ったよ。でも秘密にしておいてくれると助かるよ」

「解りました！代わりに、先輩にお願いがあるんですけど…」

「お願い？」

「俺、池袋って実は詳しく無いんですよ。だから、今度、案内して貰ってもいいですかね？」

その後、帝人先輩は了承し、別れた。

「で、帝人先輩に興味があるの？」

「うん、そうだよ。あの人と仲良くすればダラーズで色々できる。」

「ふーん。なんでもいいけど、あんまり人に迷惑かけるなよ。」

「解ったよ。」

「これから約束があるから行くね。じゃ」

と言って、その場を後にした。

自分の教室に戻ると、顔がよく似た二人の少女がいた。一人はセーラー服の舞流、もう一人は体操服を着ているのに、暗い表情をしている少女だった。

「遅いよー陽ちゃん！待ちくたびれちゃった！」

「ごめんごめん」

「いいよー許してあげる！クル姉もいいよね！？」

「謙（偉そうにしないの）…」

「痛っ」

体操服の少女はマイルをつねっていた。

痛そうだ…

「折（折原九瑠璃です）…宜（よろしくね）…」

「よろしく」

体操服の少女――折原九瑠璃はマイルの双子の姉だそうだ。

「貴（あなたが）…静（静雄さんと）…幽（幽平さんの）…妹（妹って）…真（本当？…）」

「そうだよ。」

「ね！クル姉！私の言ったことあってるでしょ！」

「肯（うん）…」

「折原臨也って知ってる？」

「誰？」

「知らないの！？私達の兄！静雄さんと同じ高校に行ってたんだよ

！」

「どんな人？」

「それはね…ってもうこんな時間！？悪いけど、私達これから用事があるの！だからもう帰るね！バイバイ！」

「バイバイ」

こうして双子と別れた。

折原臨也ってどんな人だろう？

学校の帰り道、やっぱり人がたくさんいるなあ…

そう思っていると、色んな人がこっちを見ていた。

私の格好は少し目立つ。あの双子達ほどではないが、身長は男子から見ても高いし、髪も男ぐらいの長さなのでパッと見男だ。なのに女子の制服を着ているので目立つ。もう一つは左目だ。左目に眼帯をしているので目立つ。

こうした視線を無視して歩くのは慣れた。

歩いていると

「君、ちょっといいかい？」

とても爽やかな声で声をかけられた。

振り向いて見ると、眉目秀麗という言葉を具現化したような黒いコ

ートを着た男の人がいた。

「なんでしょう？」

と、話しかけた瞬間――

ドゴォォォン！！

どこからか自動販売機が落ちてきた――

## ×2黒沼青葉（後書き）

九瑠璃の話し方って難しい…
臨也さん少しだけ登場。
これからもがんばります。

## ×3折原臨也（前書き）

先週は本当にすいませんでしたm（__）m
週末に色々ありまして…
ちなみに作者は学生なのでまたあるかもしれません。その時はお願いします。

## ×3折原臨也

ドゴオォォン！！

陽は飛んできた自動販売機を見て驚いた。誰が投げたかは分かるが、何故自動販売機が陽のいる所に落ちてくるかが分からなかった。

「あ～あ、来ちゃったか。」

黒いコートを着た男は顔を歪ませて言った。誰が来るかわかったかのように。

そして、一人の男が現れた。サングラスをかけ、バーテン服を着た背の高い男だった。

「いーざーやーくぅーん？なんでてめえが池袋にいんだあ？あれほどくんなって言ったのにわかんねぇのか？」

「しょうがないじゃないかシズちゃん。仕事で来たんだから。終わったらすぐ帰るからさあ。」

「駄目だ。てめえを見ただけで殺したくなってくるんだよぉ。しかも、俺の妹に近づいて来やがって…さっさと離れろ！！このノミ蟲野郎！！」

と、バーテン服の男――平和島静雄は近くの標識を引き抜き、黒いコートの男――折原臨也に投げた。しかし臨也は軽々と避け、逃げていった。静雄は陽の方を向いて、

「陽！！あのノミ蟲野郎には絶対に近づくなよ！！」

「なんで？」

「なんでもだ！！待ちやがれ！！いぃぃざぁぁぁやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

と言って、行ってしまった。
――今の黒いコートの人が折原臨也か…。静兄に物凄く嫌われていたけど…なんかあったのかなあ？
そう思っていると、ドレッドヘアの男が話しかけてきた。

「よぉ。陽ちゃん。」

「こんにちは。トムさん」
ドレッドヘアの男――田中トムは困った顔をしていた。

「あ~あ。まだ仕事残ってるってのに…どうすっかなあ…」

「すみません。兄が迷惑かけてしまって…所でなんであの二人は仲が悪いんですか？」

「静雄から何も聞いてないの？」

「はい」

「う~ん。高校時代になんかあったらしいんだけど、詳しくはわかんねぇなぁ…」

「そうでしたか…」

「んじゃ俺はどっかで時間潰してくるわ。」

「はい。さようなら」

こうして陽は静雄と臨也の関係は分からないままトムと別れた。

陽はしばらく町を歩いていると、扉にアニメの絵が描いてある一台のバンを見つけた。周りには若い男女が楽しそうに話していた。その中のニット帽を被った男に話しかけた。

「門田さん！こんにちはー」

「よぉ。陽じゃねぇか」

ニット帽を被った男――門田京平と親しげに話していた。そしたら、ハーフらしい男と全身黒い服を着た女が話に加わってきた。

「ねーねードタチン。その子誰？」

「ん？あぁ、こいつは静雄の妹の陽だ」

「へー！シズシズに妹いたんだー！！私は狩沢絵理華！よろしくーんでこっちが…」

「遊馬崎ウォーカーっす。よろしくっす。」

陽はハーフの男――遊馬崎ウォーカーと全身黒い服の女――狩沢絵理華に挨拶をしておいた。陽は二人共静兄の事を知ってるらしい。狩沢さんはシズシズって呼んでるし…
と呆れていると

「そんな事より、どうした？」

「門田さんに聞きたいことがありまして…静兄と臨也さんの高校時代ってどんな感じだったんですか？」

「あぁ、それはな…凄かったぞ。色々と、いろんな不良が静雄に喧嘩売ってててな。その喧嘩売ってた不良をけしかけていたのが臨也って事だ。それから静雄は臨也を見つける度に、殺し合いをするようになったんだよ。」

「そんな事があったんですか……ありがとうございました。教えてくれて。」

「いやいや、気にすんな。じゃあな」

「またねー、陽ちゃん」

「また会おうっす。」

「さようなら」

こうして陽は静雄と臨也の事が少し分かって、別れた。

陽はだいぶ暗くなり、そろそろ帰ろうか…等と考えていたら、いきなりどこから来たのか分からないがチンピラ三人が近寄ってきた。

「ねーねーそこの君ー。ちょぉーっといいかなぁー？」

「…何でしょうか？」

陽は睨みながら問いかけた。

「こわーいこわーい。そんなに睨まなくてもいいのにー」

陽はふざけた態度を取っているチンピラ達に少しイラつきながら黙っていた。

「まあ、俺らの言うこと聞けばぼーりょくふるったりしないからさあ」

「何をすればいいんですか？」

「大人しく俺らに付いてきてくてないかなあ？」

「何故あなた方に付いていかなければなりませんか？」

「君ってさあ、あの平和島静雄の彼女なんでしょ？」

「……はい？」

――ちょっと待て。どっからそんなガセネタ聞いてきたんだこの人

達は？

「しらばっくれたって無駄だよぉ？この写真は君と平和島静雄が一緒に歩いてる所だし。」

「ちょっと待って下さい！私は…」

「うるせぇ！！そこまでしらばっくれるんだったら、力ずくでやってやる！！」

なんでこんなことになってるんだ？私は否定しようとしたのに…

「…仕方がない」

「なんか言ったかてめえ！！」

と言いながら、一人のチンピラは殴りかかってきた。次の瞬間――バキィ！！――めしゃ。

という音がした。他のチンピラの二人は倒れているのは女の方が倒れていると思い、仲間にやりすぎだろ。と話しかけようとしたが、よく見ると自分達が予想していなかった光景だった。その光景は――女の方である陽が立っていて、仲間は完全に意識を失っていた。

「てめえ！！何しやがる！！」

「それはこっちのセリフだ。いきなり訳の分からない事を言われて、違うと言おうとしたら、殴りかかってきて…私には非がないはずだが？」

「うるせぇ！！ボコボコにしてやる！！」

チンピラは怒り過ぎて気付かなかった。男。しかも相手より大きい

男が女子高生に何故数メートル離れた場所にふっとんでいった理由に。
チンピラは殴ろうとして思い切り拳を振り上げた。しかし殴ろうと思っても殴れなかった。そしてとても強い衝撃が腹の部分に走った。肺にあった酸素は吐き出され、

「ガハッ！！」

という声をあげながら今度は背中に強い衝撃が走った。そこでチンピラは気を失った。

「今のパンチじゃ私に傷一つつけられないよ…さああなたはどうする？」

余裕そうな陽に対して、最後の一人になったチンピラは、――ヤバい！！この女強すぎる！！――チンピラは恐怖しかなかった。そして

「ちくしょうちくしょうちくしょうちくしょうちくしょう！！」

シャキンと音をたてて現れたのはナイフだった。

「…ッ！！」

「うらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
チンピラはナイフをもって襲いかかってきた。
――シャッ！！
陽は避けきれずに左目に着けていた眼帯が落ち、その眼帯には血が垂れていた。
「痛ッ」

「ハハハハハハハハハ！！どうした？痛いのか？俺に逆らうからこんなことになっ……」

陽が顔をあげるとチンピラの動きが止まった。チンピラは恐怖で顔歪めながら叫んだ。

「なんだよ…それは…？その左目はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

陽の左目は――光っていた。眼球が闇夜を思わせる漆黒。その真ん中にある光彩は月を思わせる銀色だった。

「この左目は――『化け物』の目だ。」

チンピラは気を失った。

「はあ…やり過ぎ…かな？」

陽は少し反省していた。左目の近くの傷はすでにふさがっていた。

――誰からあんな情報もらったのか聞こうと思ったのに…

パチパチパチパチパチパチ

「凄い凄い！！大人を一人で倒せるなんて！！」

「ッ！！」

陽はいきなりの拍手と声に驚いて音のした方をみた。そこには…

「折原…臨也…さん…？」

臨也が立っていた。

「へぇ。俺の名前知ってるんだ。嬉しいなあ。」
「あなたの妹達の九瑠璃と舞流から名前を聞いただけです。」
臨也は少しだけ顔を歪めた。そして呆れたように
「はあ…あいつらにはいつも邪魔される…だから苦手なんだよなあ。あの二人は」
「名前しか教えてもらいませんでした。静兄との因縁は門田さんに教えてもらいました。」
「ドタチンもおせっかいだねぇ。なんでシズちゃんとの出会いを言っちゃうんだか。」
「あなたはなんで静兄と仲が悪いんですか？」
「俺はね人間が好きなんだよ。愛してる！」
「…？」
――この人はなにを言っている？
「だからね、最初はシズちゃんを愛そうとしたんだけどね。どうしても愛せなかった。シズちゃんは俺がせっかく暴れられるように不良達に仕掛けたのにね。」
「そんな事静兄は喜びません！静兄は暴力が嫌いなんですから！」
「しかも俺が何かをやろうとして上手くいくって所で邪魔をしてく

る。だから苦手なんだよなあ。」

「こんなこと話してるとシズちゃんが来そうだな。まあ、今日俺が来たのは、君に話があるんだ。」

「この左目の事ですか？この左目の力を見たいからチンピラ達に嘘の情報をおしえたんですか？」

「おっ流石シズちゃんの妹！！勘が鋭い！！」

「……。」

――なんなんだ。この男は？でも青葉によく似てるな。自分は表に出ないで何かをするって所が。

「やっぱり凄いよね。その細い腕のどこにあんな馬鹿力があるのやら。」

「昼は少し強い位なんですけどね、夜になると馬鹿力が出るんですよ。」

「ふーん。その左目を付けた奴の事知りたい？」

「し…知ってるんですか？」

陽は左目を付けた人物を知らない。その頃の記憶が曖昧なのだ。話を聞くと、そこにいた研究員達は捕まったが、主犯が捕まっていないらしい。陽はあまり興味がない。

「もちろん。俺は情報屋だよ。今回は特別にタダで教えてあげよう。

」

「その人は？」

「その人物は――澱切陣内。澱切シャイニングコーポレーションの社長だ。」

「澱切シャイニングコーポレーションって聖辺ルリが所属している？」

「ああそうだよ。んじゃ俺はこれで。バイバーイ」

と言って去ってしまった。――澱切陣内…そいつが…私の左目を…陽は冷静になろうと深呼吸をした。幾分か落ち着き、考えた。

――犯人が分かった所で何も出来ないのではないか？あんな偉い人が消えては大ニュースになってしまう。復讐は止めよう。

そう決心して、陽は家に帰った。

――今まで通り過ごそう。

――彼女は気付かなかった。もうすぐ池袋の休日に巻き込まれる事を――

## ×3折原臨也（後書き）

今回は結構時間かかりました。どうでしたか？

誤字脱字などの指摘・ご意見・感想を待ってます！！

今後もよろしくおねがいしますm（__）m

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8526x/

---

デュララララ!! 池袋最強の妹!!

2011年11月17日19時52分発行